



特定非営利活動法人
国際健康美学会
 ISCOHB(イスコブ)

ニューズレター — vol. 2 —
 発行日 **2006.10.13**

記事目次

● 第3回 国際健康美学会 学術大会の開催	P1
● 学会の沿革報告 国際健康美学会副理事長 文貞華	
● 祝 辞 チェヌン大学学長 李基雨	P2
● 開会の挨拶 国際健康美学会理事長 村山静江	
● 学術発表 ① 梁英順 「韓国女性の化粧実態と化粧品 のマーケティング実例の研究」	
● 理事会の開催	P3
● 学術発表 ② 村山舞 「気エステティックイヴの瘦身結果の 実際」	
● 学術発表 ③ 金基甲 「美容関連従事者の体形比較 分析について」	
● 第1回教育研修会開催 「[チンクダイト]講師 奥田弘美 先生	P4
● 会員募集	
● お知らせ・編集後記	

第3回 国際健康美学会 学術大会の開催

今年で3回目を迎えた国際健康美学会学術大会は、2006年8月19日(土)、韓国チェヌン大学で開催されました。同大学の講堂で行なわれた本大会は「第1部 開会式」・「第2部 学術発表会」からなり、途中で理事会を挟んで行なわれました。

開会式は韓国独特の国民儀礼で始まり来賓紹介では新しく学長に就任した李基雨学長、村山静江理事長に続き、日本側の理事、韓国側から参加していた他大学の教授や美容関連業界の方達が紹介されました。



第3回国際健康美学会学術大会が、韓国チェヌン大学にて開催された。

学会の沿革報告



国際健康美学会 副理事長
 チェヌン大学 幼児保育・福祉学科 教授
文貞華

国際健康美学会は次の2つの目的の為に2004年7月14日発足した。

1. 広く一般市民に対し、健康と美容に関する情報提供、健康増進支援に関する事業を行なうことにより、生活習慣病の予防、その他健康美の維持・管理に対する意識を高め、誰もが安心して暮らせる社会作りに寄与するものである。
2. そのために、国際的な基準を満たすエステティシヤンの専門家を育成し、その地位と質の向上を目指し「国際健康美学士」の資格を取得することを目的とする。

● 2004年7月14日

東京で創立総会開催。

初代理事長に榊村山代表取締役社長村山静江氏が就任。「国際健康美学会の今後の展望について」の講演があった。

- 2005年8月6日
第2回国際健康美学会学術大会を東京都星陵会館にて開催。テーマは「肥満と健康美学～What is true health?～」
 - 2006年7月7日
「特定非営利活動法人 国際健康美学会」の登記が完了した。
 - 2006年8月19日
第3回国際健康美学会 学術大会開催。ここ韓国チェヌン大学で本日開催の運びとなった。本日は次に紹介する3名の先生方による講演を予定している。
テーマ：健康美学の追求とその実践発表
- ① 榊太平洋 PIM化粧品会社 教育部長 梁英順
＜化粧品のマーケティング実例研究＞
 - ② 気エステティックイヴ 研修センター長 榊村山 専務取締役 村山舞
＜気エステティックイヴの瘦身結果の実際＞
 - ③ チェヌン大学 ビューティコーディネーション学科 教授 金基甲
＜美容関連従事者の体形比較分析について＞

祝 辞



チェン大学 学長
李 基雨

李学長は祝辞として、「健康と美について関心がだんだん高まっていく社会の流れに沿って、美容分野の発展の為に、研究を活発に行い、国際健康美学会のさらなる発展を願っております。」と述べられた。

開会の挨拶



国際健康美学会 理事長
村山 静江

理事長挨拶としてまず、本大会の開催にあたって準備、協力された韓国チェン大学の李学長始め各教授達への感謝の言葉を述べられた。また、本学会の設立目的や、その後の経緯、現在までの活動を話され、特に 2005 年 3 月にチェン大学にビューティーコーディネーション学科が新設されたこと、そして今回、当大学で国際学会を

開催することの意義深さを示された。

以下、結びの言葉として村山理事長が述べられた内容をそのまま記した。

「今日の日をきっかけとして、今後、国際健康美学会で実施される教育や多くの研究発表が、日本と韓国のみならず、さらに国際的に発展していくことを心より願っております。そして、本会で学んだ方達が、確かな知識と技術を身に付けた「国際健康美学士」の資格を持つことで、健康と美に関する、本当の意味でのプロフェッショナルとしてのプライドを持ち、世の中の悩める人々を救い、社会に貢献できるような道を開いていけるものと信じております。そのための土台作りをしていく国際健康美学会が、さらに大きく羽ばたいていくことに期待しながら、私の挨拶とさせていただきます。」



太平洋 PIM 化粧品会社 教育部長
チェン大学 兼任教授
梁 英順

【学術発表内容（抄録より）】

韓国女性（19～55 才）1,800 名を対象に様々な調査をした結果、全年代を通して共通の悩みは「肌の乾燥」、年代別には 20 代がおできとにきび、30 代は皮膚乾燥、40～50 代は老化であった。また、韓国女性が追求する美しさは大人しくて純粋な感じの“自然さ”であり、全体の 32.9%で一番多かった。

韓国の女性達は普段、朝起きて化粧をする時、クレンジングを抜いた基礎化粧品を平均 4.2 個くらい、メイクアップ化粧品を 5.6 個くらい使用し、化粧するのに約 17 分かかった。特に、基礎化粧品は 1 個使用するのに平均 1.2 分かかったたにもかかわらず、メイクアップ化粧品は平均 1.7 分にな

『韓国女性の化粧実態と化粧品のマーケティング実例の研究』

り、メイクアップ化粧の段階が長くなれば、化粧時間は長くなる傾向がみられた。また、20 代と 50 代は 30～40 代に比べ基礎化粧の段階は短く、朝の基礎段階より夕方の基礎段階のほうが長かった。また、20 代は基礎よりメイクアップを、50 代はメイクアップより基礎を平均以上使用するなど差があったのである。

化粧品の購入にかかる費用は年齢層別に分けてみると、平均コストで 20 代は 125,000 ウォン、30 代は 153,000 ウォン、40 代は 145,000 ウォン、50 代は 127,000 ウォン、である。

消費者は、理性的ながら、感情的動物である。体験的マーケティングは消費者が理性的だけではなく感情的存在だといえる。消費者は理性的選択をするが、時々感情に流されやすく、消費経験を通じて夢をもとめ、楽しさを追求する。消費者は購買して消費する過程で楽しさを得るだけでなく、創造的な刺激をうけ、美しい感性が磨かれることを求めている。

体験的マーケティングの積極的実現方法を提示してみると、

1. 消費者が気に入っても購入につながらない場合、あらゆる手段を講じて（例えばイベント・広告など）、購買意欲を高めるよう

に誘導しなければならない。つまり、体験コーナーの対面方式が一番望ましいのである。

2. 体験コーナーの運営にあたっては、消費者が楽しく興味を引くような会場のセッティングや適切な商品のレイアウトなどが要求される。また、化粧品アドバイザーはにこやかな表情と穏やかな言葉づかいなど、あらゆる態度に気配り、消費者に不安を与えないように対応しなければならない。
3. 市場の状況や流行などをみて、消費者が求めているものを追求し、それに応えるような商品を開発しなければならない。体験的マーケティングは、五感を活用して消費者の総合的な体験に重点をおき、化粧品のみならず全分野において積極的に行なわれている。つまり、この体験的マーケティングを活用すれば、あらゆる企業が求めている顧客満足度と共にブランド企業イメージを確固たるものにできるだろう。



理事会は論文発表をはさみ行なわれた。内容については下記のとおりである。

【理事会報告】

1. 各委員会の活動報告

資格認定委員会・・・2007年2月には日本での「国際健康美学士」資格認定者が誕生する。

教育研修委員会・・・第1回目の教育研修会を今年3月に開催した。

編集委員会・・・第1号のニューズレターを作成した。

渉外・広報委員会・・・学会のホームページを作成中。近日中にアップする予定。

国際交流委員会・・・来年は日本で第4回大会を予定している。

倫理委員会・・・特に問題のなかったことを報告する。

2. 報告と審議事項

- ① NPO 法人登記とそれに伴う変更内容について
2006年7月7日・・・正式に「特定非営利活動法人国際健康美学会」としての登記を完了した。
会則の変更・・・NPO 法人の定款に沿う。細則についてはそのまま準じて運用する。
組織図の変更・・・「入会資格審査委員会」を削除「倫理委員会」に。また、副理事長の統括内容の変更をした。
会員の種別と年会費額の変更・・・正会員と賛助会員の2種類とし、年会費→正会員 8,000 円・賛助会員 10,000 円とする。
- ② 資格認定料に関する学生の特別措置について
学生の場合は 30,000 円の金額補助の

理事会の開催



特別措置により、資格認定の為の審査料と認定料を合わせて 10,000 円とする。ビューティーコーディネーション学科の卒業生には、各自 10,000 円の費用負担をしてもらい、学会から「国際健康美学士」の資格証を発行する。同時に、初年度の年会費免除の上、会員資格が与えられる。

『気エステティックイヴの瘦身結果の実際』

《目的》

「気エステティックイヴ」で実施している健康瘦身法の、肥満に対する効果について検討した。

《対象（人数・期間・年齢層）》

対象者は単純性肥満と認められた 16 歳から 75 歳までの女性 312 名である。

《方法》

健康瘦身法のトリートメント内容は、経絡瘦身法をベースに、それぞれの体質や脂肪の質・体型などを考慮し、その人に合ったオプション技術を選び組み合わせ週に 1～2 回のペースで行なった。オプション技術とは主にマッサージ類を指し、ハンドマッサージや機械を用いた施術なども含まれる。また、オプション技術はそれぞれの目的別に単独であるいはいくつかを組み合わせ

わせて行なう。

健康瘦身法は、経絡瘦身法とホームケア、栄養指導の 3 つの柱によって成り立っている。ホームケアは、自宅でブラッシング体操、ツボ押し、マッサージ等を行なうため宿題と呼んでいる。さらに、栄養指導を並行して行なっている。

《結果》

体質改善が認められた人は 312 名中、83% の 259 名である。体質改善が認められなかった人は 17% の 53 名である。

《考察》

今回の試みにより、健康瘦身法による体重・体脂肪率の減少が 312 名の全員に認められたこと、また、個人的な都合で施術を受ける回数が少ない人ほど瘦身効果が低いことから、気エステティックイヴが実践



株式会社村山 専務取締役
気エステティックイヴ 研修センター長
村山 舞

してきた健康瘦身法に一定の瘦身効果があると推測される。さらに、健康瘦身法は健康的に美しく痩せるだけではなく、体質改善を行ないながら瘦身をするため、アレルギー体質の人にも有効だと考えられる。韓国でも私共の実践する健康瘦身法を広め、肥満管理を推進していきたい。

『美容関連従事者の体形比較分析について』

“正しい姿勢で正しい精神が込められる”、“姿勢が歪めば健康に悪い”、“姿勢が悪ければ気の流れが良くない”、“姿勢の不均衡で気が良く流れない”などの例をよく見れば、姿勢は外見的なだけでなく、精神的肉体的な健康までに影響するという事が体形学の基本である。

人間は誰もが元気で美しくなりたいという本能

的な欲求がある。外形的な美しさは他人にも美しく見えないのだ。姿勢を正しくすることこそ気血の流れを円滑にし、気血の流れをスムーズにさせることこそ肌をきれいにし、身体を元気にさせるのだ。内外共の美しさを追い求める美容分野で姿勢は重要なポイントと言える。



チェムン大学 ビューティーコーディネーション学科
教授 金 基甲

第1回教育研修会開催



奥田弘美 先生

医師（精神科、緩和ケア、内科）
財団法人生涯学習開発財団認定コーチ
メディカル&ライフサポートコーチ

2006年3月19日（日）東京都中央区日本橋久松町『国際健康美学会』研修センターで、医師でもあり、メディカルサポートコーチの奥田弘美先生による、『精神科医のお医者さんが考えた1日15分の「コーチングダイエット」』の講演がありました。50名あまりの若いエステティシャンが参加し、熱心に聴講され、真剣にメモをとっていました。

同名の先生の著書より

コーチングとは、「人は自分のな

かに答えをもっている」という哲学をもとに、夢や希望を実現させるために行なう自己開発のコミュニケーション法です。

スポーツやコーチングで使われる「コーチ」の語源は、共通して「大切な人を、その人が望む目的まで送り届ける」というところからきています。

具体的でわかりやすい講義は明日からすぐに実践で使える内容で受講生は大満足でした。

会員募集

国際健康美学会では、会員を募集しております。本会の趣旨に賛同され、健康や美容に関することに興味のある方、様々な分野からご意見をお持ちの方、個人、団体を問わず広く募集しております。

本会は会員の皆様の研究発表や、情報交換、さらに皆様の様々な活動を通して、全ての人々が健康で心豊かな人生を歩めるように真の健康美を追求しあう場になりたいと考えております。ぜひ、別紙入会申込書にご記入の上、ご連絡ください。

特定非営利活動法人 国際健康美学会

〒103-0005
東京都中央区日本橋久松町11-8
久松町ビル118ビル 6F 事務局
TEL 03(5652)5888
FAX 03(3639)8460

URL <http://www.iscohb.or.jp>

お知らせ

2006年7月7日「国際健康美学会」がNPO「特定非営利活動法人」になりました。

学会のホームページが近日中にアップします。

編集後記

最近読んだ月刊誌に【「脱肥満」身体の健全化が命と財政を救う】という記事が出ていました。厚生労働省の発表によれば1985年度に16兆159億円だった国民医療費が、2004年度には32兆1,111億と大幅に増加、1984には25.3%であった40代の男性の肥満者の割合が2004年には32.7%に増え、朝食の欠食率が1985年に8%であったのが、2004年には10.5%であるという。肥満の原因は食生活の変化と運動不足といわれますが、冷凍食品やレトルト食品などの調理済み食品の利用や外食が多く、家庭内で調理した食事の割合が減っているということも関係があると思われます。

日本の食文化を見直し、食環境改善を推進することが求められているのではないのでしょうか。

（文責・寿松木）